

第15回 コーディネーターという仕事 ③**コーディネーターならではの悩みとは**

北九州「さわやか」の高原由美さんはコーディネーター歴9年のベテランコーディネーターとして、いまや「さわやか」になくってはならない存在です。しかしここに至るまでには、深い苦悩の日々があったと高原さんは言います。

コーディネーターという仕事は、ある意味で孤独な仕事です。当り前のようですが、基本的にコーディネート業務は一人のコーディネーターによる単独作業です。ある利用者について、どのボランティアとの組み合わせが最適か、一人で考え、一人で調整を行います。また、コーディネート業務は個人情報を取り扱うため、業務内容やそれに伴う悩みを第三者に話すことはなかなか難しいともいわれています。

高原さんの場合、自身も透析患者であるために「利用者さんがいかに通院送迎を必要としているかがよく分かるのです。でも、どうしてもボランティアさんが見つからなくて利用をお断りしなければならないことがあります。それが本当に申し訳なくて。」自分が上手にコーディネートが出来ないためにこのような事が起きるのだと考え、高原さんは一人で悩んでいました。しかし、ある時を境に「ふっきれた」のだと言います。それは決して悩みが無くなったということではなく、この悩みと向き合っていく覚悟、決意が高原さんのなかで固まったということでした。コーディネーターが成長するということは、人間としても成長することなのかもしれません。

ボランティアのその一言がうれしい

コーディネーターがこの仕事をしていてよかった、と感じるのはどのような時なのでしょう。やはり利用者やその家族から感謝された時が一番嬉しいのでしょうか。高原さんは「それもちろんですが、運転ボランティアさんから定年後の生きがいの一つになりましたと言われたとき、コーディネーターをしていてよかったなと思いますね。」と言います。ボランティア想いの高原さんらしい答えです。逆に目下高原さんが最も心苦しく思っているのが「ただでさえ認定講習や送迎時のステッカー装着など無理をお願いしているのに、ガソリン代の高騰でボランティアさんの負担がさらに大きくなっていること」ということでした。

“縁の下の力持ち”は今日も勉強中

高原さんに“コーディネーターの仕事を一言で表現すると？”と質問したところ、「ボランティアさんと利用者さんの架け橋」との答えが返ってきました。ただその後「そう思いながらやっているつもりですが、なかなか出来ていません。まだまだ勉強の毎日です。」と、すかさず高原さんはつけ加えます。コーディネーターはしばしば移送サービスの“縁の下の力持ち”にたとえられます。高原さんをはじめとする多くの“縁の下の力持ち”の絶え間ない頑張りによって、送迎活動はつつがなく行われているのです。

次回は…

運転ボランティアの気持ち ①